

ペンテコステのちから

(ルカ二四・四九他)

今を去ること七年前の五月、第三十八回全国聖会において主講師となつた当時七十三歳のチヨ・ヨンギ師は説教の始まりにおもむろに体操をはじめこう言った。「今までも、これからも私はペンテコステ運動のアスリートです」。この言葉を聞いたとき、私は子どもの教団の創立者である弓山先生のことを思い出した。「ペンテコスタル・ムーブメント、運動なのです。止まってはだめです。」チヨ一師も弓山師もその運動体性に注目しているのだ。とにかく動き続けなければならぬのだ。

しかし物でも人でも何かを動かすためには「力」が必要である。更に言えば地上の権威でも、人間の能力でもない、主の霊、聖霊の力が必要なのだ。今日はペンテコステ、聖霊降臨日である。以下聖霊の力の諸相について三つのことを学びたい。

一、外力

世界の救済という使命を果たすべく、十字架の死に至るまで従順な生涯を貫

かれた主イエスは復活し、天に帰るにあたり、地上生涯ですでに言及していた父の約束である聖霊を与えることをもう一度語られた。ここではそれを「いと高きところからの力」という表現で表している。いと高きところは疑いなく神のみ座であり、聖霊はそこからの力であることが教えられている。つまり私たちに与えられる聖霊の力は父なる神がキリストによつて与える力であり、私たちの「外」にある、「異」なものだということがわかる。これは大切である。というのも近年の「カリスマ医師」「カリスマ弁護士」などの呼称はどうかすると聖霊の働きを私たち自身が生得的に「持つている」能力のようなものと誤解させやすいからである。もちろん主は個々人の能力を通して働かれる。しかし教会を動かす「力」は常に上から来るのであり、その新鮮な注ぎと満たしをこそ私たちは求めていかねばならないのだ。

二、爆発力

「聖霊の力はギリシャ語ではデユナミス、デユナミスはあのノーベルが発明したダイナマイトの語源である。よつて聖霊の力はダイナマイト・パワーである」という類の解説をよく聞くが、この箇所を書いたルカ自身がそういう意図を持つてこの言葉を用了たかと思えば、答えは当然に「ノー」

である。ルカの脳裏に一八〇〇年後の発明品が浮かんでいたと考えることは極めて不合理だからである。とはいえこれをつのたとえ(アナロジー)として考えれば妥当性は十分だ。ちょうど爆発が同心円状に広がっていくように、初代教会の伝道はエルサレムにとどまらず、ユダヤとサマリヤ、アジア、更にはマケドニアやアカヤ(ギリシヤ)といった具合に広がっていったからである。聖霊が下り、人の心に火が付くと、その人は伝道せずにはおれない。信徒も牧師も関係ない。人生を変えた素晴らしいお方であるイエス・キリストを紹介せずにはおれなくなるのだ。

三、回復力

しかし罪に満ちた人間社会にイエス・キリストの「良き知らせ」が届いていくことは生半ではない。特に最初に聖霊の力を受けた弟子たちは皆ユダヤ人であったから、彼らの中に根差していた強固にして狭隘な選民思想や民族主義を打破するのは人にはできないことであつた。しかし聖霊は上より下り、彼らの偏狭な意識を打ち砕く。サマリヤではペテロとヨハネの、そしてコルネリオの家ではペテロとユダヤ人信者の眼前に聖霊の注ぎは見える形で表れたのだ。それだけではない。パウロの第二次伝道旅行の際、当初予定されていた小ア

ジアでの伝道を中断させ、かつトロアスでマケドニア人の幻を見させてギリシヤ伝道へ導いたのも聖霊の力であつた。聖霊は氷のごとく固まった罪と差別をその炎で温め、聖い水で溶かして、全世界に福音を宣べ伝えさせたのである。ハレルヤ！

* * *

三〇歳でアメリカに渡つた彼はオハイオ州クリーブランドの下町に一軒の店と二件の家を持つ一才した成功者だつた。もともとはルーテル派の信仰を持っていたが、病弱な娘のために「いやし」の集会に行き、いやしを体験したのがきっかけでペンテコステ運動に触れた。彼は偉大な聖霊の力を求め、それを受けるまでは店を閉めると決意して祈り、聖霊の恵みを体験した。宣教の情熱に燃やされた彼が故郷ドイツに戻ろうと祈つていたとき聞こえた神の声はなんと「ジャパン」。「ノー、ジャパン。アリエマセン」と彼は言った。しかしこの顛末を夫人に話すとなんと彼女は黒髪に黒い瞳の女の子の幻を見たという。彼らは聖霊に説得され日本にやつてきた。彼の名はフジユルゲンセン、私たちの教団の礎石となつた宣教師である。五十一歳の彼を動かしたのは聖霊の力でありその働きは今日も続いている。今聖霊の力を求め、私達も自分を超えて行くのではないか！